

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：33905

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520078

研究課題名(和文)幕末維新时期護法論の思想史的研究

研究課題名(英文)A Study of Intellectual History in Buddhism Apologetics in the Bakumatsu Japan

研究代表者

桐原 健真(KIRIHARA, Kenshin)

金城学院大学・文学部・准教授

研究者番号：70396414

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は近世と近代の架橋である。多くの研究者がこの転換期を取り扱い、豊かな成果を挙げてきた。だがその多くは政治史的関心に基づいており、思想・宗教史的関心を持つものは少ない。事実、何人かの歴史学者が本研究題目に「護法」の語を見たとき、その意味を問うている。彼らは「法」を「仏法」ではなく「法律」と考えたのである。

本研究組織は、19世紀日本に関する一般的な叙述に政治史への傾斜を看取した若い研究者たちによって組織され、思想・宗教の視点からの歴史叙述を目指すものであった。特に彼らは護法論や排耶論として知られる仏教者の活動に注意を向けた。それは、幕末日本における文化空間を描き出す試みであった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research was to build a bridge from the Tokugawa period to the Meiji era. Many scholars studied this changeover period and provided plentiful results. However the most of them were on the subject of political history, there were only a few scholars who are concerned with history of intellectual or religions. Actually, when some historians, who found the word Goho (Buddhist apologetics) in this research's subject, asked its meaning, because they thought that Ho meant not dharma but law. They had little interest in the subject of intellectual or religions.

This research group which was organized by young scholars, who perceived a tendency toward political history in the popular description of the 19c Japan, aimed to describe a history from the viewpoints of intellectual and religions. Especially, they had an eye to the workings of Buddhist Priests known as Gohoron or Haiyaron (antichrist). It was an attempt to depict the Cultural Space in the Bakumatsu Japan.

研究分野：日本倫理思想史

キーワード：護法護国 排耶論 近世仏教 近代仏教 キリスト教 仏教墮落論 儒学 国学

1. 研究開始当初の背景

幕末維新时期に関する歴史叙述において、思想史的内容はもっぱら「尊王」や「攘夷」といったような政治思想的な関心から描かれることが少なくなかった。こうした傾向は、日本の歴史叙述全般における重点が、政治史を中心に展開されてきたことと無関係ではない。

とりわけ、当該期における仏教を中心とした宗教空間の叙述は、かならずしも厚いものではなかった。たとえ叙述されるにせよ、水戸学や国学に基づく尊王攘夷論者による廃仏毀釈運動や維新後の神仏分離を一つの頂点として描かれることがしばしばである。

かつて服部之総は、「廃仏毀釈」を「やがてきたるべきブルジョア民主主義革命〔自由民権運動〕」の「まえぶれとしての宗教改革」として評価している（服部「本願寺教団の民主化」1948年）。それはいわば、近世日本において存在した仏教を、「攻撃されるべき墮落した仏教」として把握する立場であり、こうした理解は今日に至るまで強く残っている（たとえば、「葬式仏教」批判などを想起せよ）。

こうした「近世仏教墮落論」は、明治以降の仏教者たちもまた、みずからの過去を反省する際の〈語り〉でもあった。日本における仏教を近代化するにあたって、近世のそれは、「廃毀」されるにふさわしい否定されるべきものとして、仏教者自身によっても認識されたのである。

このような、学術と当事者双方における日本の近世仏教への冷淡な態度は、そこで展開した独自の知的営為の存在とその価値をも見失わせるものでもあった。本研究は、こうした学術状況を鑑み、「廃仏毀釈」を前提とするのではない近世後期から維新时期にかけての日本の思想的・宗教的世界を描き出すことをめざして出発したのである。

2. 研究の目的

本研究は、近世と近代を架橋する時期である幕末維新时期における護法思想あるいは護法論の展開を主題とするものである。そもそも護法論とは、仏教者による自己弁証apologetica的な語りであり、その構造を検討していくことは、当該時期における彼らの問題関心や仏教理解を明らかにすることにつながるはずである。

これまで、幕末維新时期における護法論については、尊王攘夷や廃仏毀釈といった政治史的な文脈のうえから叙述されてきた。本研究は、こうした政治史の成果をふまつつも、さらに宗教を信仰する一個の人間としての仏教者自身のあり方を見据え、その主張の歴史的意味を問うていくものである。それは、たんに政治思想史に回収され

るのではない、当時の日本における宗教空間全体を描き出す試みに他ならない。

このことは神仏分離による仏教界の激変を経て、大きく変容せられた近代日本における死生観や宗教観の一つの始原を明らかにするとともに、19世紀後半に成立する日本の仏教の固有性を強調するようないわゆる「日本仏教」言説や、自己修養や個人倫理、さらには在俗性を主張する「仏教近代化」論の思想的系譜を描き出すものとなることをも企図するものであった。

3. 研究の方法

2000年代以降、近代日本における仏教の存在形態に関する研究は、日本史・思想史・宗教学・社会学などのさまざまな視点から進められ、学際的な議論を踏まえた成果が次々と発表されてきた。

たとえば、大谷栄一による在家仏教運動とナショナリズムの展開をめぐる研究（『近代日本の日蓮主義運動』法藏館、2001年）、末木文美士の思想史的研究（『明治思想家論』・『近代日本と仏教』ともにトランスビュー、2004年）、岡田正彦によって邦訳されたジェームズ・ケテラーの研究成果（『邪教／殉教の明治』ペリカン社、2006年）、谷川穰の教育史研究（『明治前期の教育・教化・仏教』思文閣出版、2008年）、また本研究組織の構成員の一部が代表・参加し編まれた小川原正道編『近代日本の仏教者』（慶應義塾大学出版会、2010年）などが挙げられよう。これらはいずれも各々の問題関心に立脚し、独自の視点から学術上の諸分野を止揚させた研究であると言ってよい。

他方、近世日本における仏教の存在形態の研究に関しては、社会史の方面から、辻善之助以来の「近世仏教墮落論」に代わったかたちでの「通史」が探求され、高埜利彦が『近世日本の国家権力と宗教』（東京大学出版会、1989年）などで明らかにした複層的な宗教空間としての近世社会論に基づいた成果が発表された（たとえば「近世の宗教と社会」シリーズ：『地域のひろがり』と宗教』・『国家権力と宗教』・『民衆の「知」と宗教』いずれも吉川弘文館、2008年）。また思想史の視点からは、西村玲『近世仏教思想の独創』（トランスビュー、2008年）や末木文美士『近世の仏教』（吉川弘文館、2010年）が挙げられよう。

このように近年、近世および近代の仏教研究は、それぞれ大きく展開した。しかしそれは時代区分という枠組みにおいて語られることに留まっており、これらの時代の成果を総合的・連続的に捉えるような研究はいまだ少ない。とりわけ近世と近代とを跨越する形での「19世紀学」的な研究は、緒に就いたばかりである。

これは近代仏教の「始原」に対する研究蓄積の欠如という問題にも直結するもので

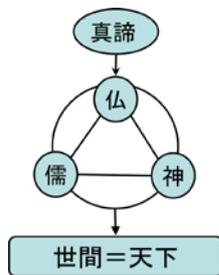
ある。この問題の主要な原因には、近世と近代における成果を連続的に把握する視座の欠落がある。本研究では、これまで近世と近代とを架橋する時期であるがゆえに双方の研究分野から見落とされてきた幕末維新期の仏教を主題とすることで、この問題に解答を出すことを目指してきた。

そもそも幕末期の仏教研究は、月性などの護法僧に関する伝記的考察を除いて、大きく停滞しており、また維新史研究では、「廃仏毀釈」なる用語で概括されるのが現状であって、「近世から近代へ」という史的転換の語りにおいて、「近世的な排仏論→廃仏毀釈の惹起→〈墮落〉した僧侶の覚醒」という墮落論的な図式は未だ根強い。

本研究は、江戸時代後期の仏教批判および「外患」としての「耶蘇教」の再登場などの影響下で現れた護法論を「僧侶覚醒」の過程でなく、「近世仏教」と「近代仏教」とを架橋する思想的営みとしてその連続と断絶を描き出すことに努めた。

4. 研究成果

幕末護法論は、近世日本における仏教の社会的・文化的そして政治的地位の揺らぎを背景にあらわれた仏教者による自己弁証的な語りであった。それゆえそこには、みずからが理想とする世界像が崩壊することへの危機感が見て取ることができるのであり、ひいては彼らがいかに近世日本の宗教空間を認識していたのかを理解することができるのである。



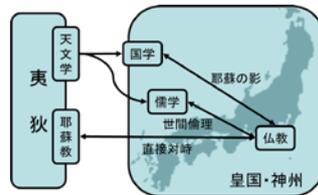
本来、仏教者にとって、神儒仏の三教は、ともに真理を目指し、「世間=天下」を導く教えとしては、その目的は一致するものであり、ただ、その真理への到達方法において異なるにすぎないものであった。もとより、仏教こそが、真理にもっとも正しく、もっとも適切に達する「道」であると、彼らは考えていたが、神儒二道の存在そのものを否定することはなかった。神道は、仏教との習合無しには、その理論的基礎を得られなかったし、仏教もまた神道という回路を経由すること無くしては、「世間」と関ることが困難であったからである。また、朱子学を中心とする儒学も、日本における出発点が五山にあることから分かるように、学問的・文化的な相補関係にあった。

しかし、こうした調和のとれた三教関係は、神儒両教における排仏の動きによって動揺を与えられることとなる。本来同じ目的を目指していると考えられていたこれら二教各々の立場から展開される排仏論に対して、仏教者は応えなければならなくなっ

たのである。

とりわけ平田篤胤『出定笑語』の登場は、排仏論の反駁としての護法論を量的にも質的にも大きく変容させた。

すなわち、それまで「求道」という目的においては融和的であった仏教者の語り、これらの排仏論に対してはきわめて排他的なものになったのである。そして、この排他的な語り、幕末における開国過程の中で再登場したキリスト教に対しても援用されることとなった。



こうした意味で、幕末護法論は、国学的排仏論とキリスト教という二正面——しかも国学

は西洋天文学というかたちでの「耶蘇の影」が見え隠れしていた——での闘いであったのであり、それは仏教そのものの存在理由を問う世界観闘争とでも言うべき様相を呈していたのである。

こうした幕末護法論に関する見取り図を確立したうえで、本研究では、以下のようなシンポジウム・パネルセッションなどを通して、その成果を公開してきた。

2013年1月27日には、佛教史学会の月例会(会場・龍谷大学)において、司会に守屋友江(阪南大学)、コメンテータに末木文美士(国際日本文化研究センター)・谷川穰(京都大学)およびオリオン・クラウタウ(龍谷大学〈当時〉)を迎え、「近世仏教とその彼方——他者としてのキリスト教と思想の再編成」と題するミニシンポジウムが開催された。

ここで、松金直美(同朋大学仏教文化研究所〈当時〉)「近世仏教教団の「切支丹」に対する認識と対応——京坂「切支丹」一件を通して」、岩田真美「幕末維新期における真宗僧のキリスト教観」および西村玲「近世・近代仏教におけるキリスト教観——禅仏教の視点から」が発表されている。

さらに2014年10月26日には、日本思想史学会2014年度大会(会場・愛知学院大学)でのパネルセッション「近代日本仏教の「前夜」——幕末維新期における護法論の射程」が、オリオン・クラウタウを代表として開催された。この際、西村玲「近世排耶論の思想史的展開」、松金直美(真宗大谷派教学研究)「真宗僧侶にみる自省自戒意識——近世後期における護法思想として」、上野大輔「戦時下における真宗護法論の様相」および岩田真美「明治期の妙好人伝にみる護法思想」が発表されている。

本研究は、近世と近代とを架橋する幕末維新期において展開した「護法思想」を中心とする仏教者の自己弁証的な語りの構造を明らかにすることを目的とするものであったが、若手研究者をもって研究組織を構

成したこともあり、所属の入れ替わりが多く、このために一貫した活動を実現することが難しかった点に、多少の悔いを残すところであるが、全体として多くの成果を公開することができたことは、所期の研究計画を十分に果たすことができたと考えるものである。

とくに、2015年3月には、本研究におけるこれまでの歩みを回顧すべく、その研究成果を編集・再録した『幕末護法論とその周辺』を刊行した。これにより、本研究を総括するとともに、今後における当該研究の裾野の広がりを期待するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 28 件)

1. 岩田真美 「近代の妙好人伝にみる女性仏教者像」『龍谷大学論集第 485 号、2015 年、1-22 頁、査読なし
2. 上野大輔 「幕末期の戦争と寺院・僧侶—長州藩の事例より」『史学』2015 年、29-57 頁、査読なし
3. 桐原健真 「「公論」はどこへ行ったか? : 幕末日本における言論空間の所在」『環』60 号、2015 年、218-224 頁、査読なし
4. 上野大輔 「幕藩領主の呪術的儀礼と真宗僧侶」稲葉継陽・花岡興史・三澤純編『中近世の領主支配と民間社会—吉村豊雄先生ご退職記念論文集—』(熊本出版文化会館) 2014 年、249-270 頁、査読なし
5. 桐原健真 「吉田松陰 (1830-59)・山鹿素行 (1622-85) : 近世日「中国」問題」『環』57 号、2014 年、279-282 頁、査読なし
6. 桐原健真 「渡辺崋山 (1793-1841)・高野長英 (1804-50) : 日本への目覚め」『環』57 号、2014 年、271-274 頁、査読なし
7. 松金直美 「東西分派後の東本願寺」同朋大学仏教文化研究所編『教如と東西本願寺』法蔵館単行本、2014 年、137-153 頁、査読なし
8. 岩田真美 「戦後における親鸞論と森龍吉の「真宗思想史」構想」『真宗学』第 129・130 合併号、2014 年、369 - 387 頁、査読あり
9. 岩田真美 「明治期の真宗にみる新仏教運動の影響—高輪仏教大学を事例として—」『真宗研究』第 58 輯、2014 年、93 - 111 頁、査読あり
10. 上野大輔 「(書評) オリオン・クラウタウ著『近代日本思想としての仏教史学』」『歴史評論』765、2014 年、98-102 頁、査読あり
11. 桐原健真 「近代日本における魂のゆくえ : 戦時歌謡をてがかりに」金城日本語日本文化 90、2014 年、1-12 頁、査読なし
12. 桐原健真 「会沢正志斎『新論』岩波講座・日本の思想 3 巻『内と外 : 対外観と自己像の形成』、2014 年、262-273 頁、査読なし
13. 桐原健真 「弘道館とその祭神 : 会沢正志斎の神道思想」佐々木寛司編『近代日本の地域史的展開 : 政治・文化・経済』岩田書院単行本、2014 年、15-38 頁、査読なし
14. 松金直美 「同朋大学仏教文化研究所蔵古書目録—應通文庫—」『同朋大学佛教文化研究所紀要』第 33 号、2013 年、159-186 頁、査読なし
15. 松金直美 「大谷大学真宗総合研究所編『親鸞像の再構築』」『歴史の広場—大谷大学日本史の会誌—』第 16 号、2013 年、49-53 頁、査読なし
16. 松金直美 「[史料寸考] 天保九年西本願寺門跡広如関東参向行列の図」『歴史の広場—大谷大学日本史の会誌—』第 16 号、2013 年、33-39 頁、査読なし
17. 曾根原理・朴澤直秀・藤田和敏・松金直美「[研究ノート] 成菩提院所蔵近世文書の諸相」『日本仏教総合研究』第 11 号、2013 年、111-125 頁、査読なし
18. 上野大輔 「杉本家と西本願寺」『奈良屋杉本家二百七十年の歩み—近世から近代への京商家—商い・生活・信仰』公益財団法人奈良屋記念杉本家保存会、2013 年、58-66 頁、査読なし
19. 上野大輔 「近世後期における真宗信仰と通俗道徳」『史学』82-1・2、2013 年、81-104 頁、査読なし
20. 上野大輔 「近世後期における真宗信仰と通俗道徳史学」『三田史学会』第 82 巻第 1・2 号、2013 年、81-104 頁、査読なし
21. 岩田真美 「十九世紀の真宗とキリスト教—自他認識をめぐって—」『真宗学』127 号、2013 年、74-95 頁、査読なし
22. 桐原健真 「「開国物語」を解体する」『環』50 号、2012 年、436-439 頁、査読なし
23. 小川原正道 「本多庸一における「政治」」『法学研究』第 85 巻第 8 号、2012 年、1 - 21 頁、査読なし
24. 小川原正道 「村松愛蔵における信仰と政治」『法学研究』第 85 巻第 4 号、2012 年、1 - 19 頁、査読なし
25. 上野大輔 「近世後期「捨世派」僧侶の布教と地域民衆—大日比西円寺の法岸・法洲・法道に着目して—」、『仏教史研究』49 号、2012 年、26-48 頁、査読なし
26. 岩田真美 「近代移行期における真宗思想の一断面—超然の護法思想を中心に—」『龍谷大学論集』480 号、2012 年、28-52 頁、査読なし

27. 桐原健真、オリオン・クラウタウ「幕末維新期の護法思想・再考」『日本思想史学』44号2012年、63-70頁、査読なし
28. クラウタウ、オリオン「十五年戦争期における宮本正尊と日本仏教」『近代仏教』19号、2012年、26-39頁、査読なし

〔学会発表〕(計36件)

1. 桐原健真「地球規模化する世界を読む：吉田松陰を手がかりに」NPO法人泉州てらこや(招待講演)、2015年3月28日、泉大津市・生福寺
2. 松金直美「東本願寺門跡の関東参向と尾張」郷土文化研究会、2015年2月21日、名古屋市鶴舞中央図書館
3. 岩田真美「江戸から明治への真宗教学史の一断面——超然について」龍谷大学仏教文化研究所2014年度第8回研究談話会(招待講演)、2015年1月14日、龍谷大学
4. 岩田真美「Takanawa Buddhist University's International Network——The Activities of the International Buddhist」Buddhism: Plural Colonialisms and Plural Modernities」、2014年12月13日、龍谷大学
5. 松金直美「東本願寺教団と幕藩権力—加賀藩領を事例として—」京都大学人文科学研究所 共同研究「日本宗教史像の再構築」第5回研究会、2014年11月16日、京都大学人文科学研究所
6. 桐原健真「渋沢栄一の選択：論語の時代的意味」「二松学舎と渋沢栄一」研究会(招待講演)、2014年10月31日、千代田区・日本工業倶楽部
7. 松金直美「真宗僧侶にみる自省自戒意識—近世後期における護法思想として—」日本思想史学会2014年度大会パネルセッション、2014年10月25日、愛知学院大学
8. 岩田真美「明治期の妙好人伝にみる護法思想」日本思想史学会2014年度大会パネルセッション、2014年10月25日、愛知学院大学
9. 上野大輔「戦時下における真宗護法論の様相」日本思想史学会2014年度大会パネルセッション、2014年10月25日、愛知学院大学
10. 松金直美「近世後期における護法・排耶論の変遷—真宗僧侶にみる内省的意識を通して—」大谷大学日本史の会、2014年9月27日、大谷大学
11. 松金直美「仏教における学問と蔵書の継承—近世から近代へ—」日本宗教史懇話会サマーセミナー、2014年8月21日、滋賀県高島市・白浜荘
12. 松金直美「門跡達如と近世後期の東本願寺教団—両堂再建・関東参向を通し

- て—」東海印度学仏教学会第60回学術大会、2014年7月12日、同朋大学
13. 上野大輔「幕藩領主の祈祷と真宗僧侶」2014年度三田史学会大会、2014年6月21日、慶應義塾大学
14. 岩田真美「幕末維新期の本願寺教団と親鸞研究の再編」龍谷大学アジア仏教文化研究センター2014年度第1回国内シンポジウム「近代日本仏教と親鸞」、2014年5月17日、龍谷大学
15. 上野大輔「草創期の近世史叙述における仏教像」第22回日本近代仏教史研究会研究大会、2014年5月10日、駒澤大学
16. 桐原健真「鎖国日本」言説と永久開国論：「第三の開国」をめぐる日本と東アジアの未来を考える委員会(招待講演)、2014年2月22日、千代田区・都道府県会館
17. 岩田真美「親鸞聖人と島地黙雷師」千代田女学園報恩講・講演(招待講演)、2014年1月24日、千代田女学園中学校・高等学校
18. 岩田真美「長州僧、奔る—明治維新と真宗僧の活躍—」NPO法人 周防大島郷土大学・講演(招待講演)、2013年11月30日、山口県大島郡・東和総合センター
19. 桐原健真「近代日本における魂のゆくえ：「九段の母」を手がかりに」日本語日本文化学会講演会(招待講演)、2013年11月20日、金城学院大学
20. 桐原健真「神無き国の神殿としての病院」キャリアアップ講座看取りコース(招待講演)、2013年11月17日、神戸学院大学
21. 桐原健真「連続と断絶：水戸学と維新のあいだ」人文学部地域史シンポジウム「明治維新と茨城の歴史」(招待講演)、2013年11月16日、茨城大学
22. 上野大輔「近世仏教墮落論」の呪縛と宗教史像の模索「仏教と近代」研究会、2013年9月14日、愛知学院大学
23. 岩田真美「明治期の真宗にみる新仏教運動の影響—高輪仏教大学を事例として—」真宗連合学会第60回大会、2013年6月14日、龍谷大学
24. 上野大輔「近世中後期の教団自治と寺社行政—新たな基本枠組に関する試論—」歴史学研究会日本近世史部会例会、2013年3月9日、慶應義塾大学
25. 岩田真美「19世紀における真宗とキリスト教との交渉」第4回龍谷大学国際シンポジウム、2013年2月22日、米国合衆国・南カリフォルニア大学
26. 岩田真美「幕末維新期における真宗僧のキリスト教観」佛教史学会、2013年1月27日、龍谷大学
27. 桐原健真「The West as a Mirror: An Origin of the Ethnocentrism in the

Nineteenth Century Japan] “19 世紀的東
亜与美国：紀念衛三畏誕生 200 周年”
国際学術研討会（招待講演）、2012 年
12 月 16 日、中華人民共和国・北京外
国語大学

28. クラウタウ、オリオン「近代日本の仏
教学と「仏教/Buddhism」の語り方」
シンポジウム「近代仏教—トランスナ
ショナルな視点から」(招待講演)、2012
年 12 月 8 日、国際日本文化研究センタ
ー
29. 桐原健真「弘道館祭神論争：会沢正志
斎の神道思想」日本思想史学会、2012
年 10 月 28 日、愛媛大学
30. 桐原健真「連続と断絶—服部之総の「親
鸞」」日本宗教学会、2012 年 9 月 9 日、
皇學館大学
31. クラウタウ、オリオン「戦後日本仏教
学説の課題」日本宗教学会、2012 年 9
月 9 日、皇學館大学
32. 岩田真美「近代における仏教者のキリ
スト教観—島地黙雷・大等を中心に—」
日本宗教学会、2012 年 9 月 8 日、皇學
館大学
33. 岩田真美「近代と真宗—キリスト教と
の出会いを通して—」真宗学研究学会、
2012 年 9 月 5 日、岐阜聖徳学園大学
34. クラウタウ、オリオン「近代日本仏教
研究の過去と現在」龍谷大学アジア仏
教文化研究センター ユニット 3 研究
会（招待講演）、2012 年 7 月 16 日、龍
谷大学
35. 岩田真美「幕末維新期における真宗護
法論—近世から近代への仏教思想の展
開—」第一回「仏教と近代」研究会、
2012 年 5 月 26 日、龍谷大学
36. 小川原正道「対華二十一箇条要求と仏
教：布教権をめぐる」日本近代仏教
史研究会第 20 回研究大会、2012 年 5
月 12 日、青山学院大学

〔図書〕（計 4 件）

1. 桐原健真『吉田松陰：「日本」を発見し
た思想家』（単著）筑摩書房、2014 年、
256 頁
2. 小川原正道『明治の政治家と信仰—ク
リスチャン民権家の肖像』（単著）吉川
弘文館、2013 年、194 頁
3. クラウタウ、オリオン『近代日本思想
としての仏教史学』（単著）法蔵館、2012
年、340 頁
4. 小川原正道『福澤諭吉の政治思想』（単
著）慶應義塾大学出版会、2012 年、280
頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

<http://www.kinjo-u.ac.jp/kirihara/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

桐原健真 (KIRIHARA, Kenshin)
金城学院大学・文学部・准教授
研究者番号：70396414

(2)研究分担者

小川原正道 (OGAWARA, Masamichi)
慶應義塾大学・法学部・准教授
研究者番号：40352637

クラウタウ オリオン (KLAUTAU, Orion)
龍谷大学・アジア仏教文化研究センタ
ー・博士研究員
研究者番号：10634967

松金直美 (MATSUKANE, Naomi)
同朋大学・文学部・研究員
研究者番号：10549554

岩田真美 (IWATA, Mami)
龍谷大学・文学部・講師
研究者番号：90610642

上野大輔 (UENO, Daisuke)
慶應義塾大学・文学部・助教
研究者番号：90632117